

〔総 説〕

研究レビューから導出する中学校及び高等学校での
「体づくり運動」の課題：保健体育科教員養成課程
における教育の質向上に向けた一考察

白石 智也¹・松本 佑介²・藤島 廉²

**A Review of Research on “Physical Fitness” in Junior High Schools and
High Schools: Toward Improving the Quality of Learning in
Physical Education Teacher Training Courses**

Tomoya SHIRAISHI, Yusuke MATSUMOTO, Ren FUJISHIMA

Abstract

The purpose of this study was to examine the issues related to “physical fitness” in junior high schools and high schools based on previous studies on this area, and to examine what university students in physical education (PE) teacher training courses should learn regarding “physical fitness”. A search was conducted on CiNii Articles (a Japanese article database) and 27 previous studies were selected for analysis. From these studies, issues related to “physical fitness” in junior high schools and high schools were extracted and analyzed using part of the KJ method. As a result, the following two points were suggested: (1) It is important to study the characteristics of “physical fitness” in the PE teacher training course because it was found that many teachers lacked an adequate understanding of the characteristics of this area. (2) It was indicated that having students study appropriate teaching materials and conduct micro-teaching in the “physical fitness” class in the PE teacher training course will help them become more competent teachers.

Keywords

Literature review, Exercise for releasing body and mind, Exercise to enhance physical fitness, PE teacher

文献研究, 体ほぐしの運動, 体の動きを高める運動, 体育教師

1. はじめに

学習指導要領の体育科・保健体育科の中に、「体づくり運動」という運動領域が位置付けられ、20年以上が経過した。「体づくり運動」は、平成10

年及び11年の学習指導要領改訂において、それまでの「体操」領域が改められる形で実施されるようになった運動領域である¹⁾。

「体づくり運動」が位置付けられた背景には、運動好きの子どもと運動嫌いの子どもの二極化傾

¹ 広島文化学園大学人間健康学部 (Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

² 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

(Doctoral Course, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)

向、並びに、教育環境の変化に伴う子どもの精神的ストレスの増大及び生活習慣の乱れなどが挙げられる²⁾。そのため、「体づくり運動」の内容として、従前の「体操」領域の目標を引き継いだ「体力を高める運動」に加え、体の調子を整えたり、心と体を一体として捉えたりすることをねらいとした「体ほぐしの運動」が設定されていた。しかし、平成29年及び30年の学習指導要領改訂に伴い、「体力を高める運動」の名称が、中学校入学年次とその次の年次においては「体の動きを高める運動」に、中学校第3学年と高等学校では「実生活に生かす運動の計画」に改称された。この背景として、「『体力を高める』という名称のイメージから、柔軟性・巧緻性・筋力・持久力といった体力要素を高めるトレーニングとしてとらえられたり、体力測定の数値向上だけが目指されたり」(p.161)³⁾したことが挙げられる。

また、社会課題の遷移に伴い、対象となる学年についても変化がみられてきた。「体づくり運動」が位置付けられた平成10年及び11年の学習指導要領改訂時においては、小学校高学年から学習が開始される領域となっていた一方で⁴⁾、先述した二極化傾向や精神的ストレスの増大は、小学校低学年でもみられるという課題に基づき⁵⁾、平成20年及び21年の改訂に際して、小学校低学年及び中学年¹⁾においても学習され始めた⁶⁾。これにより、各学年の発達段階に即した目標及び内容が取り決められ、小学校低学年から高等学校まで、より系統的な学習が可能となった。

以上の通り、「体づくり運動」が学習指導要領に組み込まれて以降、名称、内容、対象学年などが変化しており、時代の変遷とともに、1つの運動領域として発展してきている様子が窺える。しかしながら、学校現場における「体づくり運動」の授業については、未だ課題が山積している。その理由として、三本木ほか¹⁾は、「体づくり運動」の特性として、「定められた運動の様式があるわけではないので、比較的自由な発想のもとに授業を構成できる一方で、内容の曖昧さが現場の教員を悩ませることにもつながる」(p.51)と述べて

いる。また、松本⁷⁾は、村田⁸⁾の先行研究を引用した上で、「体づくり運動」について、社会的・教育的課題に対処する必要性から、十分な実践の蓄積がない状態で導入された運動領域であると指摘している。さらに、佐藤⁹⁾も、現場の教師の声を整理した上で、「文化としての体系をもたない体づくり運動では、何をどう扱えばよいのかイメージが十分には湧かない」(p.28)と主張している。これらのことから、「体づくり運動」が、現場の教師を悩ませる運動領域となっていることは否めない。

このような課題を改善、あるいは解決するためには、教員養成課程における教育を充実させることが重要であろう。なぜなら、教員養成課程の学生の「体づくり運動」に関する知見・経験の乏しさは、多くの先行研究で指摘されており、そのような実態が、直接現場での課題に結びついていると考えられるからである。例えば、檜皮¹⁰⁾は、体育系学部に所属する大学生に対して、「体づくり運動」の被教育経験について調査した結果、大学入学前に「体づくり運動」という言葉を聞いたことがあったと回答した学生は39%であったと報告している。また、木村ほか¹¹⁾は、小学校教員養成課程の学生に対する調査の中で、学習指導要領で挙げられている他の運動領域と比較し、「体づくり運動」の認知度は極めて低いという結果が出たと述べている。高田¹²⁾も同様に、大学に入学して初めて「体づくり運動」の授業を受講したと述べる学生がいたことを指摘している。

「授業の質は、授業を行う『教師』の質に依存する」(p.126)¹³⁾ことを踏まえると、現場でみられる授業の課題を教員養成課程の学修に還元することは重要であるといえる。一方で、単一の先行研究や事例的な調査からそれらの課題を抽出することは、研究者の恣意的な考えに影響される可能性が高くなると予想されるため、本研究では、研究レビューを実施する。また、小学校教員養成課程における学生は、小学校教諭の免許状取得に際して、「体育科教育法」のような体育科を包括する授業科目を受講する必要はあるものの、「体つ

くり運動」に関する授業科目を受講することは少ないと考えられる。したがって、本研究では、「体づくり運動」に関する授業科目が設置されている可能性の高い保健体育科教員養成課程における学修への還元を目指し、中学校及び高等学校に関連する先行研究を対象とする。

以上を踏まえ、本研究では、中学校及び高等学校における「体づくり運動」についての先行研究から、中学校・高等学校の「体づくり運動」に関する課題を整理する。その結果を基に、保健体育科教員養成課程での「体づくり運動」において、学生が学修すべき事項について検討し、保健体育科教員養成課程における「体づくり運動」の教育の質向上に向けた一助とすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査内容

本研究では、中学校及び高等学校における「体づくり運動」の課題に焦点を当てるが、高橋¹⁴⁾は、①学習者、②運動教材（内容）、③教師、の3点を体育授業の学習活動を生み出す3大条件であると述べている。したがって、本研究においても、中学校及び高等学校における「体づくり運動」に関して、「学習者」、「運動教材（内容）」、「教師」という3つの観点の課題を抽出することが重要であると考え、3つの観定のいずれかに関連する課題を抽出した。

また、これら3つの観点の中でも、調査結果やデータを踏まえた上での課題もあれば、改善に向けた提案のように記されている課題もある。そのため、本研究では、網羅的に課題を捉えるため、過去と現在における事実としての課題だけでなく、未来の展望として記される課題についても抽出した。一方で、これら3つの観定は、あくまでも課題を抽出するための視角であり、分析の枠組みやカテゴリーとして用いるものではない。

なお、本節に記された調査内容は、保健体育科教員養成に従事する大学教員である筆頭著者、並びに、大学院博士課程後期に在籍する現役の高等

学校保健体育科教師の第2著者及び第3著者の計3名により、討議した上で設定した。

2.2. 調査方法

欧米の文献を基に文献レビューについて整理した大木・彦¹⁵⁾によると、文献レビューとは、「課題設定、文献収集、文献分析（品質評価）、文献統合、執筆という異なる5つの基本的なステップで構成される」（p.14）という。本研究では、この大木・彦¹⁵⁾の論考を参考にした上で、5つのステップのうち、最初の「課題設定」及び最後の「執筆」というステップを除く、「文献収集、文献分析（品質評価）、文献統合」という3つのステップを援用する。他方、本研究では、書籍は分析対象には含まず、論文検索サイトでヒットする文献、要するに「先行研究」を対象とするため、(1)先行研究収集、(2)先行研究分析(品質評価)、(3)先行研究統合、と名称を変更し、これら3つのステップを調査方法として採用した。

2.2.1. 先行研究収集

先行研究収集のステップにおいては、日本の主要なデータベースを含む論文検索サイトである国立情報学研究所の「CiNii Articles」を用いた。学校種及び運動領域の名称等を組み合わせ、AND検索を実施した。

検索結果は、表1に示す通りである。計141件がヒットし、2007年以前に発行された先行研究である43編を除外した後、重複していた17編を除外した。2008年以降の先行研究を対象とした理由は、平成20年及び21年の学習指導要領改訂に伴い、「はじめて小1から高3まで全学年で体づくり運動が位置付けられ」（p.36）¹⁶⁾ たという、学習指導要領上で大きな変化がみられたからである。

2.2.2. 先行研究分析（品質評価）

先行研究分析（品質評価）のステップでは、2.2.1.においてスクリーニングした後の計81編の先行研究について、題目・抄録も含めて内容を精読し、計27編を分析対象とした。なお、図1は、

表1. 学術論文検索サイトにおける検索結果（2021年8月14日）

検索ワード	体づくり運動	体ほぐしの運動	体力を高める運動	体の動きを高める運動	実生活に生かす運動の計画	(合計)
中学	43件	14件	3件	0件	0件	60件
高校	13件	1件	2件	0件	0件	16件
高等学校	23件	3件	5件	0件	0件	31件
保健体育	20件	11件	3件	0件	0件	34件
(合計)	99件	29件	13件	0件	0件	141件

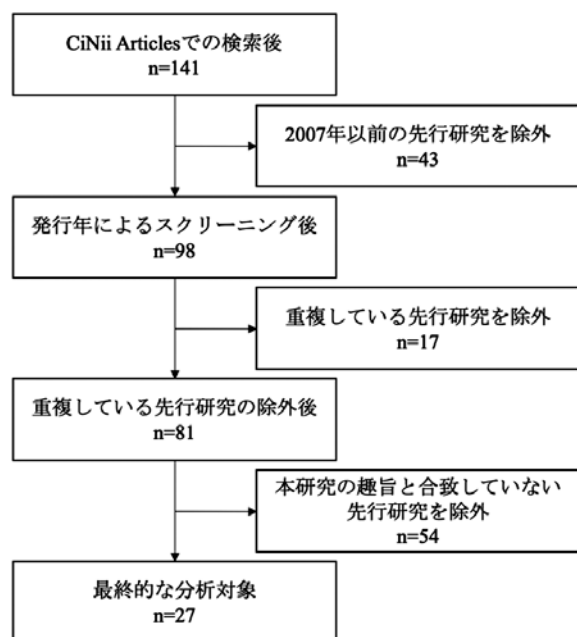


図1. スクリーニングの手順

2.2.1.も含めて、スクリーニングの手順を図式化したものである。

品質評価の観点において、本研究の趣旨と異なるもの、学会発表要旨などは除外の対象とした。一方で、学会のシンポジウム資料については、文章や図表から、学校における実践の様子、並びに調査の結果などが詳細に把握できたものについては、分析の対象とした。

2.2.3. 先行研究統合

先行研究統合のステップにおいて、まず、表2⁽²⁾に示す通り、分析対象とした先行研究の著者・発行年・題目・掲載雑誌を一覧にした。その後、各先行研究を精読した上で、中学校及び高等学校における「体づくり運動」に関する課題が記されている箇所を抜粋した。

なお、本節に記された調査について、まず、筆頭著者が、本研究で分析対象とする先行研究を選定し、第2著者及び第3著者に提示した。この選定結果について異論はなかったため、各著者が、分析対象とした先行研究を精読し、中学校及び高等学校における「体づくり運動」に関する課題が記されている箇所を抜粋した。その後、それぞれが抜粋した課題を持ち寄り、3名が納得できるまで討議を実施し、中学校及び高等学校における「体づくり運動」に関する課題を整理した。

2.3. 分析方法

2.2.3.のステップで得られた「中学校及び高等学校における『体づくり運動』に関する課題」について、KJ法の4つのステップのうち、「紙きれづくり」(p.48)¹⁷⁾及び「グループ編成」(p.56)¹⁷⁾を採用して分析を実施した。この2つのステップのみを踏む方法は、体育学関連の研究では、荒井・中村¹⁸⁾や岡田ほか¹⁹⁾などで用いられている。

「紙きれづくり」では、各先行研究から、「中学校・高等学校における『体づくり運動』に関する課題」を抽出し、それを紙きれに付す作業を行った。続いての「グループ編成」では、各紙きれの中で、類似したものをグループ化し、これらのグループを小グループとした。また、小グループも同様に、類似したものを集めて中グループとした。このように、「小分けから大分けへと進む」(p.60)¹⁷⁾手順を踏みながら、分類は不可能であると判断することができるまで、帰納的にグループ編成を行った。

なお、本節に記された分析は、著者の3名によって、「複数の調査者」で分析を実施する「トライ

表2. 本研究において分析対象とした先行研究の一覧

番号	著者	発行年	タイトル	掲載雑誌
1	山本清文・星川秀利・知念かおる・山本満寿代	2019	中学校体育授業の体づくり運動領域にエアロビックを取り入れる試みの研究Ⅱ	「花園大学文学部研究紀要」51巻 1-21.
2	一戸祐介	2019	高等学校の体育：体づくり運動の導入	「女子体育」61巻 4・5号、50-55.
3	三宅理子	2019	高等学校における「体づくり運動」の体力を高める運動の授業研究Ⅱ：長期休業中の「トレーニング日誌」から	「中等教育研究紀要／広島大学附属福山中・高等学校」59巻 224-229.
4	渡邊健一・三村寛一	2019	高等学校体育科における「体づくり運動」の現状と課題	「大阪成蹊大学紀要」5巻 313-322.
5	遠藤憲雄	2018	中学・高校体育授業内で「基礎体力トレーニング」を継続することによる効果・影響について—保健体育科分野「体づくり運動」の実践—	「仙台大学大学院スポーツ科学研究修士論文集」19巻 113-120.
6	佐藤吉高	2018	パフォーマンス課題を活用した保健体育の授業開発と効果の検証：ワークシヨップ提案型の体づくり運動の授業を通して	「2018年度徳川スポーツ研究助成研究成果報告書」286-292.
7	伊藤久仁	2018	体づくり運動授業のこれまでとこれから	「体育科教育学研究」34巻 1号、38-43.
8	矢部哲也	2018	高校生が抱える不安やストレスに対して体づくり運動が及ぼす軽減効果	「教育医学」64巻 2号 181-190.
9	小林博隆・加藤勇之助・田沼洋勝	2017	中学校体育授業の体づくり運動領域にエアロビックを取り入れる試み	「大阪体育大学紀要」48巻 137-142.
10	木原慎介	2017	「思考・判断」を促す学習指導と評価の検証：中学校第1学年体づくり運動の事例	「体育科教育学研究」33巻 1号、49-55.
11	三宅理子・岩部順・岡本昌規・合田大輔・高田光代・藤本隆弘・生田文翔・松本茂	2017	高等学校体育における「体づくり運動」の体力を高める運動の授業研究：体力科学を学ぶことに焦点を当てて	「中等教育研究紀要／広島大学附属福山中・高等学校」57巻 188-197.
12	佐藤若	2017	高等学校体育における指導体験が生徒の資質・能力の育成に及ぼす効果の検討：スポーツVI（体づくり運動）を通して	「女子体育」59巻 2・3号、46-51.
13	鈴木慶子・松平昭二・岡田雄樹・近藤智晴	2016	中学校体育における体づくり運動の体力を高める運動に焦点を当てた授業に関する事例的研究	「体育科教育学研究」32巻 1号、21-32.
14	岩永智子・野田義勝・堤公一	2016	体づくり運動の評価における一考察：中学校第1学年「体づくり運動」を通して	「佐賀大学教育実践研究」33巻 479-486.
15	森勇示	2015	「体づくり運動」の実践提案—「身体アライメント」という視点—	「愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学：創作編」64巻 27-36.
16	近藤和久・周東和好・伊藤政展	2015	中学校の体づくり運動における長なわとび運動が生徒の集団凝集性と運動有感性に及ぼす影響	「上越教育大学研究紀要」34巻 265-274.
17	松本奈緒	2015	中学校段階の体はぐしの運動における学習者の概念形成—ふだし法による自由記述とインタビューの分析を通して—	「体育科教育学研究」31巻 2号、1-16.
18	小林恵・柴田一浩	2014	中学校の体育：体づくり運動で自分・体方向上計画体づくりは、仲間づくり、自分づくり！	「女子体育」56巻 6・7号、42-47.
19	三田部勇	2014	中学校の体育：体づくり運動 効率よく組み合わせた運動で体力アップ	「女子体育」56巻 4・5号、50-55.
20	大松敬子・田中讓・入口豊	2013	生涯にわたる実践を目標にした高校女子生徒を対象とした「体づくり運動」(2) 高校1年生を対象にしたボールエクササイズのカリキュラム	「大阪教育大学紀要第5部門 教科教育」61巻 2号、35-45.
21	佐藤秀敏	2012	中学校の体育：「体づくり運動」における授業実践 気付き・調整・交流を目指した「体はぐしの運動」	「女子体育」54巻 6・7号、38-43.
22	関野智史・國川聖子	2012	中学校の体育：体づくり運動（Gボール単元）2人組で上達！多様な動きでバランス能力向上！	「女子体育」54巻 4・5号、44-49.
23	大松敬子	2012	高1女子生徒を対象としたボールエクササイズを用いた「体づくり運動」の実践—バランススポーツを用いて—	「研究紀要」45巻 93-98.
24	大松敬子・田中讓・入口豊	2012	生涯にわたる実践を目標にした高校女子生徒を対象とした「体づくり運動」：ボールエクササイズを用いて	「大阪教育大学紀要第5部門 教科教育」61巻 1号、73-85.
25	吉村彰夫・石川英志	2011	中学校体育科授業における「体づくり運動」に関する実践開発—カリキュラム上の位置付けの考察と運動プログラムの提案—	「岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究」13巻 127-153.
26	大松敬子・田中讓・入口豊	2011	バランスボールを使った「体づくり運動」における主体的な取り組みの実践：女子高校生を対象に	「大阪教育大学紀要第5部門 教科教育」60巻 1号、27-38.
27	三宅良輔	2011	ホームページを利用した教材開発：小学校から高等学校における体づくり運動「組立体操」のWeb教材開発	「日本体育大学体育研究所雑誌」36巻 1号、29-41.

アンギュレーション」(p.297)²⁰⁾を行い、その内の妥当性を担保した。意見が一致していない箇所は、3名ともが納得できるまで討議を実施し、解釈の収束点を模索した。

3. 結果

まず、紙きれづくりを行った結果、計85枚の紙きれが作成された。それらをもとにグループ編成を行った結果、表3に示す通り、大グループまで編成が可能であり、最終的に3つの大グループが生成された。小グループの編成については、紙幅の都合上省略するが、中グループ及び大グループの編成を以下に記す。なお、グループ編成の手順は、2.3.で記している通りであるが、説明の便宜上、ここではそれぞれの大グループに分けて結果を論述する。

1つ目の大グループ「領域の特性の理解及び指導計画・教材研究の重要性」について、まず、「生徒が適切な課題設定をすることのできる授業内容の選定」、「生徒の実生活に結びつけられる授業内容の選定」、「授業における適切な運動量の確保」、「生徒の実態に応じた授業内容の選定」、「生徒の関心を引き出す授業内容の選定」、「動画教材の必要性」、「学習指導要領に示された事例のみの実施」という7つの小グループから、「教材選定の重要性及び難しさ」という中グループが生成された。次に、「授業で取り扱うべき内容の不明瞭さ」及び「教師の『体づくり運動』の被教育経験の乏しさ」という2つの小グループから、「『体づくり運動』領域の内容の不明瞭さ」という中グループが生成された。また、「新体力テストの結果活用と体力強化の重視」及び「学習内容として実施されている準備運動・整理運動・補強運動・集団行動」という2つの小グループから、「『体づくり運動』領域の目標・内容に沿わない授業の実施」という中グループが生成された。さらに、「単元全体のイメージの重要性」及び「横断的及び縦断的な計画・指導の必要性」という2つの小グループから、「縦断的視点を保持した『体づくり運動』

の計画・指導」という中グループが生成された。加えて、「『体づくり運動』の実施率の低さ」、「帯状単元としての授業実施」、「教師の『体づくり運動』に対する軽視」という3つの小グループから、「『体づくり運動』の授業実施率の低さ及び望ましくない実施方法」という中グループが生成された。そして、「学習指導要領における『体づくり運動』の位置付け」という小グループは、他の小グループと統合ができなかったため、そのまま中グループとして位置付けた。以上、6つの中グループから、「領域の特性の理解及び指導計画・教材研究の重要性」という大グループが生成された。

続いて、2つ目の大グループ「授業における実態と課題及びそれに伴う評価の難しさ」について、まず、「教師による押し付け的な授業実施の危うさ」、「教師の声かけ」、「生徒同士の関わり合いの重要性」、「コミュニケーションが苦手な生徒への対応」という4つの小グループから、「授業における教師から生徒に対する指導・声かけ・生徒対応」という中グループが生成された。次に、「生徒が筋道立った運動を計画・実施することの難しさ」、「生徒が思考・判断したことを表現する難しさ」、「生徒自身の現状把握と主体的な運動実施」という3つの小グループから、「授業における生徒の課題」という中グループが生成された。また、「評価方法の妥当性」という小グループは、他の小グループと統合ができなかったため、そのまま中グループとして位置付けた。以上、3つの中グループから、「授業における実態と課題及びそれに伴う評価の難しさ」という大グループが生成された。

最後に、3つ目の大グループ「現代の子どもが有する諸課題」について、まず、「子どもの運動に関する二極化の問題」、「子どもの体力不足」、「子どもの運動習慣の未定着」、「子どもの運動能力の偏り」という4つの小グループから、「子どもの運動・体力に関する課題」という中グループが生成された。次に、「子どもの問題行動の増加」及び「子どものストレスに対する予防的対応」という2つの小グループから、「子どもの行動面・精神面に

表3. 分析における「グループ編成」の結果

大グループ	中グループ	小グループ	具体例
教材選定の重要性及び難しさ (17)		生徒が適切な課題設定をすることのできる授業内容の選定 (5)	「体育に関して言えば、『体力低下』『運動の二極化』などの問題は『体力・運動能力、運動習慣等調査』を根拠にしている。教師が体育授業でこれを根拠に課題設定をしたとしても、生徒には社会的問題を解決する責任もなく、興味をもつ者も少ないであろう」(森, 2015, p.35)
		生徒の実生活に結びつけられる授業内容の選定 (4)	「トレーニングプログラムをつくっても、子どもたちが、実際の生活に結びつけて考えるところまで至らない」(伊藤, 2018, p.39)
		授業における適切な運動量の確保 (3)	「実際の授業で行われている体づくり運動の『体力を高める運動』においては運動時間の確保など様々な課題がある」(三宅ほか, 2017, p.188)
		生徒の実態に応じた授業内容の選定 (2)	「体力の向上は、本来個人の体力レベルに応じたものでなければならない」(大松ほか, 2013, p.35)
		生徒の関心を引き出す授業内容の選定 (1)	「誰もが手軽にできる運動なので、動きが深まらないから、一回二回で飽きてしまう」(伊藤, 2018, p.39)
		動画教材の必要性 (1)	「体操および体づくり運動の領域では、イラストや写真での運動内容がなかなか伝わりにくく、動画教材の必要性が言われ続けられている」(三宅, 2011, p.29)
		学習指導要領に示された事例のみの実施 (1)	「学習指導要領の体づくり運動では、系統的な技能や動きを例示することが適さないため『行い方の例』や『運動の計画と実践の例』が示されているが、それを単に実施するだけで、本当の意味での授業という集団的な学びになるのだろうか」(三宅ほか, 2017, p.188)
		授業で取り扱うべき内容の不明瞭さ (9)	「いまだ活動の実態や具体的な教材が分からないという理由で実施しない教員が多く存在しているという現状」(松本, 2015, p.2)
		教師の「体づくり運動」の被教育経験の乏しさ (1)	「自分が生徒だった頃の実験がほぼ無い」(一戸, 2019, p.55)
		領域の特性の理解及び指導計画・教材研究の重要性 (50)	「体づくり運動」領域の内容の不明瞭さ (10)
学習内容として実施されている準備運動・整理運動・補強運動・集団行動 (5)	「集合点呼の後、各運動の領域で行われる固定化された準備運動、補強運動、整理運動は、その運動領域の時間の枠であり、『体づくり運動』領域を学習したことにはならない」(渡邊・三村, 2019, p.320)		
縦断的視点を保持した「体づくり運動」の計画・指導 (4)	単元全体のイメージの重要性 (3)		「7単位時間以上をどのように配当し、何に重点をおいて指導するか」(小林・柴田, 2014, p.42)
	横断的及び縦断的な計画・指導の必要性 (1)		「単元や分野、教科を超えて横断的・縦断的に指導していく必要があるため、その規準や評価方法についても再検討しなければならない」(木原, 2017, p.54)
「体づくり運動」の授業実施率の低さ及び望ましくない実施方法 (6)	「体づくり運動」の実施率の低さ (4)		「学習指導要領に基づいた『体づくり運動』は定着されておらず、その理念を再認識するの必要が認められた」(渡邊・三村, 2019, p.320)
	帯状単元としての授業実施 (1)		「『带状』の実施では、この領域の単元計画や1時間の授業展開を考える必要がなく、単独単元・単独授業としての発展は望めなくなる」(森, 2015, p.27)
	教師の「体づくり運動」に対する軽視 (1)		「体育分野の中では、正直、軽い扱いをしてしまっている」(伊藤, 2018, p.39)
学習指導要領における「体づくり運動」の位置付け (3)			「なぜ、すべての領域(スポーツ)の土台となるべき『体づくり運動』が、他の領域同様に並列的に位置づいているのだろうか」(吉村・石川, 2011, p.128)
授業における教師から生徒に対する指導・声かけ・生徒対応 (9)	教師による押し付け的な授業実施の危うさ (4)		「『体づくり運動』領域の指導は、ともすれば体力づくりを意識しすぎる教師側からの押し付けによる一斉的授業になりがちである」(大松ほか, 2011, p.27)
	教師の声かけ (2)		「キーとなるのは、授業者の語りかけ、問いかけではないか」(伊藤, 2018, p.40)
	生徒同士の関わり合いの重要性 (2)	「生徒が知識や技能をもとに新たに何かを創出する授業内容時は相互作用行動、特に矯正のフィードバックで生徒の活動を支援することが生徒の活動をスムーズに進める鍵となり得る」(佐藤, 2018, p.292)	
	コミュニケーションが苦手な生徒への対応 (1)	「今後さらに注意を払わなければならないと考えているのが、発達障害を抱えた生徒の対応である」(一戸, 2019, p.55)	
授業における実態と課題及びそれに伴う評価の難しさ (15)	生徒が筋道立った運動を計画・実施することの難しさ (2)	「運動の計画を立てた生徒が、必ずしもその通りに動くわけではなく、仲間の動きをみて不意に変更を加えたり、全く計画とは異なる動きを行う生徒も一定程度は存在する」(鈴木ほか, 2017, p.31)	
	生徒が思考・判断したことを表現する難しさ (1)	「『安全上の留意点を当てはめる』思考・判断については、ほとんどの生徒が学習したことを色々な場面に当てはめることができている一方で、分かりやすく書くということがあまりできていないことが分かった」(木原, 2017, p.53)	
	生徒自身の現状把握と主体的な運動実施 (1)	「生徒自身が体力の現状を客観的に把握した上で、自ら課題を設定し、解決のために主体的に取り組んでいくことが必要である」(三宅ほか, 2017, p.188)	
評価方法の妥当性 (2)		「子どもが授業を通して身につけたものを一元的に評価しない」(松本, 2015, p.2)	
現代の子どもが有する諸課題 (20)	子どもの運動・体力に関する課題 (18)	子どもの運動に関する二極化の問題 (7)	「運動習慣の二極化がいつそう進んでいるとみられる」(遠藤, 2018, p.114)
		子どもの体力低下現象 (7)	「子どもの体力低下現象」(大松ほか, 2013, p.35)
		子どもの運動習慣の未定着 (3)	「生涯にわたって運動に親しむための能力が十分に育てられていない」(遠藤, 2018, p.114)
	子どもの行動面・精神面に関する課題 (2)	子どもの運動能力の偏り (1)	「専門的に一つのスポーツだけに打ち込む子どもの数は年々増え、いわゆる『偏った体力』を持った子どもや『一つの運動』しかできない子どもが増加しているという現状がある」(吉村・石川, 2011, p.127)
		子どもの問題行動の増加 (1)	「近年、高校生による不登校やいじめ、自殺、暴力行為などといった問題行動が社会的にも大きな関心を集めている」(矢部, 2018, p.181)
		子どものストレスに対する予防的対応 (1)	「小学生から高校生の時期に、精神疾患を引き起こす可能性のあるストレスに対し予防的対応をとっていくことが必要である」(矢部, 2018, p.182)

関する課題」という中グループが生成された。以上、2つの中グループから、「現代の子どもが有する諸課題」という大グループが生成された。

4. 考察

本研究の目的として、保健体育科教員養成課程における「体づくり運動」の教育の質向上に向けた一助とすることを挙げている。したがって、分析の結果を踏まえた上で、保健体育科教員養成課程における「体づくり運動」に関する科目の中で、どのような授業が展開される必要があるのかという観点から考察する。

4.1. 「体づくり運動」領域の特性の理解

まず、「体づくり運動」の特性の理解の重要性を挙げる。本研究の分析では、中学校及び高等学校における「体づくり運動」に関する課題を整理した。その結果、全85項目の課題が抽出され、3つの大グループが生成されたが、その中でも、「領域の特性の理解及び指導計画・教材研究の重要性」には、50項目の課題が分類された。このことから、「体づくり運動」の特性について、教師の理解の乏しさに関する課題が、学校現場において散見されるということが窺える。

この実態を踏まえ、保健体育科教員養成課程において、体系的な教育を提供するために、まずは学習指導要領の理解が必要であると考えられる。なぜなら、先述した大グループに位置付く小グループの中で、「学習内容として実施されている準備運動・整理運動・補強運動・集団行動」や「『体づくり運動』の実施率の低さ」、「带状単元としての授業実施」などがあり、これらの課題は、学習指導要領の理解不足に起因すると推察されるからである。

このことについて、まず、保健体育科教員養成課程の学生は、森²¹⁾が指摘するような带状単元による実施の課題を学習することが必要であろう。森²¹⁾は、授業始め及び授業終わりの数分間において、体操やトレーニングを行い、「その蓄

積をもって年間授業時数を履修したことになる」(p.27)という形態で「体づくり運動」を展開している学校が多いのではないかと、現場の課題を提起している。文部科学省⁵⁾は、「体づくり運動」の指導資料の改訂版の中で、「他の運動領域の準備運動や補強運動として、単元の導入時などに少ない時間を帯のように位置付けるのではなく、学習指導要領に示された『運動』、『態度』、『知識、思考・判断（小学校は思考・判断）』の内容を確実に指導するとともに、体づくり運動としての学習評価の妥当性、信頼性を高めることが大切」(p.76)であると明記している。一方で、先述した通り、大学生の「体づくり運動」の認知率は極めて低く¹⁰⁻¹²⁾、中学校及び高等学校で、「体づくり運動」を带状単元として位置付けていることによって、「体づくり運動」の名称を聞かぬまま、大学に入学している学生も多く存在すると考えられる。したがって、「体づくり運動」の带状単元としての実施は適切ではなく、単独単元及び単独授業の考え方を教育することが肝要であろう。

また、学習指導要領における「体づくり運動」の目標は、決して新体力テストの得点を向上させることではない。一方で、本研究の分析において、「新体力テストの結果活用と体力強化の重視」という小グループが生成された。これは、先述した通り、従来の学習指導要領において設定されていた「体力を高める運動」という領域名の影響を少なからず受けていると考えられる³⁾。しかしながら、現行の学習指導要領では、そのような名称と目的の齟齬を解消するために、「体の動きを高める運動」及び「実生活に生かす運動の計画」という領域名に変更されている。さらに、森²¹⁾は、新体力テストの得点を基に生徒に課題意識を持たせる手法について、得点を持ち出すことで、「平均点」が基準とされることが多くなり、平均以下の生徒が必ず存在してしまう事態が垣間見えると指摘している。これは、「体づくり運動」、並びに運動全般に対する忌避感を抱かせる原因になるという。現行の学習指導要領での名称変更に伴い、「体づくり運動」の目標に即さない実践は少なく

なっていくことが期待されるものの、保健体育科教員養成課程においても、その理解を促す必要はあると考えられる。

他方、学習指導要領に「体づくり運動」が位置付けられた背景には、現代の子どもたちの身体的及び精神的な課題が関係している²⁾。本研究の分析において生成された大グループの1つには「現代の子どもが有する諸課題」がある。また、この大グループは、「子どもの運動・体力に関する課題」と「子どもの行動面・精神面に関する課題」という2つの中グループで構成されている。このことから、多くの先行研究において、子どもの身体的及び精神的な課題と「体づくり運動」が関連づけられていることが窺え、「体づくり運動」は、他の運動領域と比べても、子どもが有する諸課題の改善・解決への貢献が求められている領域であるといえる。そのため、学生にこれらの背景を把握させた上で、上記のような教育を施すことが重要ではなからうか。

4.2. 教材研究及び模擬授業の実施

続いて、教材研究及び模擬授業の実施について考察したい。まず、教材研究については、「領域の特性の理解及び指導計画・教材研究の重要性」の大グループに分類されている「教材選定の重要性及び難しさ」並びに「『体づくり運動』領域の内容の不明瞭さ」という中グループに着目する。この2つの小グループには、それぞれ17項目と10項目の課題が分類されており、多くの保健体育科教師が、これらの課題を抱えていると推察される。換言すると、「体づくり運動」領域の内容の不明瞭さが、授業で取り扱う教材の選定を難しくしているといえよう。そのため、保健体育科教員養成課程においては、先述した領域の特性を理解した上で、多様な教材を取り扱いながら授業を展開することが望ましいと考えられる。また、当該科目を担当する大学教員は、各教材が有する特質や効果などを、学生に伝える必要もあるといえる。さらに、「体づくり運動」は、「体ほぐしの運動」と「体の動きを高める運動」及び「実生活に

生かす運動の計画」から構成されているが、特定の運動、あるいは様式があるわけではなく、教材の創意工夫が求められるため³⁾、保健体育科教員養成課程においても、生徒観を設定した上で教材研究を行うなどの学修が必要であろう。

続いて、模擬授業の重要性についても触れたい。模擬授業は、「学校現場で行われている体育授業を、模擬的に行うものであり、教員養成及び現職教員の指導力向上を目的として行われるもの」(p.286)²²⁾と定義され、保健体育科教員養成課程においては、一般的に「保健体育科教育法」などの授業科目で展開されることが多い²³⁾。この模擬授業の中では、習得した知識を基に授業を計画する学習だけでなく、実際に計画した授業内容の実行可能性を試すことができたり、授業において生徒役を担う学生に対する対応・声かけを練習することができたりする。本研究の分析の結果、「授業における実態と課題及びそれに伴う評価の難しさ」という大グループが生成されており、この大グループには、「授業における教師から生徒に対する指導・声かけ・生徒対応」や「授業における生徒の課題」などの中グループが位置付いている。これらのグループに分類されるような課題を解決するためには、模擬授業を実施する中で、生徒役の学生が直面した課題の把握・共有を促したり、そのような学生への声かけに対する意識を強調したりすることが効果的ではなからうか。

他方で、別の大グループの中には、「縦断的視点を保持した『体づくり運動』の計画・指導」という中グループが分類されている。この観点に関する課題にアプローチするのであれば、模擬授業を計画する際に、単元構造図まで作成することが望ましいと考えられる。鈴木ほか²⁴⁾は、「体づくり運動」の授業を構成する際に、「単元を構成する枠組みと単元構成上の配慮事項といった単元のイメージを具体化できるヒントが重要となる」(p.31)と述べている。したがって、単元の構成の仕方を学ぶ「保健体育科教育法」などのような授業科目の学習と相互に関連させながら、「体づくり運動」の模擬授業を展開することが重要であ

ると考えられる。

5. おわりに

本研究では、中学校及び高等学校における「体づくり運動」についての先行研究から、中学校・高等学校の「体づくり運動」に関する課題を整理した上で、保健体育科教員養成課程での「体づくり運動」において、学生が学修すべき事項について検討し、保健体育科教員養成課程における「体づくり運動」の教育の質向上に向けた一助とすることを目的とした。本研究の成果は、以下の3点に集約される。

- 1) 保健体育科教師の多くは、「体づくり運動」の特性の理解について、課題を有していることが明らかになった。そのため、学習指導要領における「体づくり運動」の目標や内容などの理解、並びに、「体づくり運動」の背景にある子どもの諸課題に関する知識の習得などが、保健体育科教員養成課程における教育では必要であると考えられる。
- 2) 「体づくり運動」領域の内容の不明瞭さが、授業で取り扱う教材の選定を難しくしていることが窺えた。したがって、保健体育科教員養成課程においては、先述した領域の特性を理解した上で、生徒観を設定するなどの工夫を施しながら、多様な教材を用いて授業を展開することが望ましいと考えられる。
- 3) 「体づくり運動」の授業においては、生徒に対する声かけや、生徒の課題の把握などが重要であると示唆された。そのため、保健体育科教員養成課程の「体づくり運動」において、模擬授業を実施し、計画した授業内容の実行可能性を試したり、生徒役を担う学生に対する対応・声かけを練習したりする学習が重要になると考えられる。また、その際、単元構造図を作成する練習も行うことで、「体づくり運動」の単元全体のイメージを持ちながら授業を構成するという力も身に付けさせることができるであろう。

佐々木²⁾は、「『体づくり運動』の指導は実に多様化を極めており、学校現場ではその取り組みに学校間格差があるのが実情である」(p.57)と述べている。本研究で得られた示唆が、保健体育科教員養成課程における「体づくり運動」の教育の質向上に寄与し、このような「体づくり運動」に関する学校間格差が是正されていくことを期待したい。

付記

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金(課題研究番号:20K02887)の補助を受けて行われた。

脚注

- (1) 現行の小学校学習指導要領において、「体づくり運動」は、大きく「体づくり運動系」と括られており、各学年で領域名が異なる。低学年においては、「体づくりの運動遊び」という領域名であり、「体ほぐしの運動遊び」及び「多様な動きをつくる運動遊び」で構成されている。中学年及び高学年においては、「体づくり運動」という領域名は共通であるものの、中学年では、「体ほぐしの運動」及び「多様な動きをつくる運動」で構成されており、高学年では、「体ほぐしの運動」及び「体の動きを高める運動」で構成されている⁶⁾。
- (2) 表2の中に記載している先行研究の中で、文章中において引用していないものは、以下の「引用・参考文献」では列挙していない。

引用・参考文献

- 1) 三本木温・渡邊陵由・工藤祐太郎・高嶋渉・嶋崎綾乃(2016)「学校体育における『体づくり運動』の現状について」『産業文化研究』25号, 45-52.
- 2) 佐々木浩(2018)「戦後小学校体育科における『体づくり運動』の学習指導論の変遷とその問題点」『国士館人文学』8巻, 57-76.

- 3) 大塚隆 (2021) 「体の動きを高める運動の教材づくり・授業づくり」岡出美則・友添秀則・岩田靖編著『体育科教育学入門 [三訂版]』大修館書店, pp.161-170.
- 4) 文部科学省 (online) 『小学校学習指導要領 (平成10年12月告示, 15年12月一部改正)』文部科学省HP.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320008.htm (参照日:2021年10月21日).
- 5) 文部科学省 (2013) 『学校体育実技指導資料 第7集 体づくり運動—授業の考え方と進め方— (改訂版)』東洋館出版社.
- 6) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説体育編』東洋館出版社.
- 7) 松本奈緒 (2015) 「中学校段階の体ほぐしの運動における学習者の概念形成—ふきだし法による自由記述とインタビューの分析を通して—」『体育科教育学研究』31巻, 2号, 1-16.
- 8) 村田芳子 (2001) 「『体ほぐしの運動』の単元づくりはどうあるべきか」『体育科教育』49巻, 5号, 20-23.
- 9) 佐藤善人 (2017) 「エビデンスベースの『体づくり運動』を求めて」『体育科教育』65巻, 12号, 28-31.
- 10) 檜皮貴子 (2013) 「大学生における『体づくり運動』の実施経験と意識調査: 駿河台大学の学生を対象として」『駿河台大学論叢』46号, 97-111.
- 11) 木村博人・中丸信吾・梁川悦美・山田美絵子 (2014) 「学校体育における用語の認識に関する一考察: 『体づくり運動』領域と『ギムナスティック』に焦点をあてて」『東京家政大学研究紀要』54巻, 1号, 17-25.
- 12) 高田康史 (2017) 「『体づくり運動』の可能性と限界—これまでの実施状況から考える—」『体育科教育』65巻, 12号, 32-35.
- 13) 岩田昌太郎 (2021) 「教師教育研究」体育科教育学会編『体育科教育学研究ハンドブック』大修館書店, pp.126-132.
- 14) 高橋健夫 (2021) 「体育科教育学で何を学ぶのか」岡出美則・友添秀則・岩田靖編著『体育科教育学入門 [三訂版]』大修館書店, pp.1-8.
- 15) 大木秀一・彦聖美 (2013) 「研究方法論としての文献レビュー—英米の書籍による検討—」『石川看護雑誌』10巻, 7-18.
- 16) 細越淳二・清田美紀・美越英宣・眞榮里耕太 (2017) 「これからの体づくり運動を展望する」『体育科教育』65巻, 12号, 36-46.
- 17) 川喜田二郎 (1970) 『続・発想法—KJ法の展開と応用—』中公新書.
- 18) 荒井弘和・中村友浩 (2009) 「知的障害者の親における身体活動・運動実施の阻害要因と促進要因」『体育学研究』54巻, 1号, 213-219.
- 19) 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史・根本想 (2018) 「日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究: オリンピック・パラリンピック教育を実施した教員の視点に着目して」『体育学研究』63巻, 2号, 871-883.
- 20) メリアム: 堀薫夫ほか訳 (2004) 『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー—』ミネルヴァ書房.
- 21) 森勇示 (2015) 「『体づくり運動』の実践提案—『身体アライメント』という視点—」『愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編』64巻, 27-36.
- 22) 三田部勇 (2021) 「模擬授業の意義と効果的な進め方」岡出美則・友添秀則・岩田靖編著『体育科教育学入門 [三訂版]』大修館書店, pp.286-292.
- 23) 田井健太郎・河合史菜・元嶋菜美香・久保田もか・高橋浩二・宮良俊行 (2018) 「教員養成課程における保健体育模擬授業に関する研究—授業場面と形成的授業評価に着目して—」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』第1巻, 29-38.
- 24) 鈴木慶子・松平昭二・岡田雄樹・近藤智靖 (2016) 「中学校体育における体づくり運動の体力を高める運動に焦点を当てた授業に関する事例的研究」『体育科教育学研究』32巻, 1号, 21-32.